

社内支援技術向上を目的とした ワーキンググループの取り組み

○豊崎 美樹

(株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所／主任研究員)

菊池 ゆう子

(株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所／主任研究員)

勿田 文記

(株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所／主幹主任研究員)

会社名 **株式会社スタートライン**

設立 2009年12月15日

所在地 東京都三鷹市

従業員数 **378名**(2024年10月時点)

拠点(年度内開設予定含む)

サテライトオフィス INCLU

計13拠点(東京、神奈川、埼玉、大阪)

屋内型農園 IBUKI FARM

計23拠点(東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪)

コーヒー豆焙煎 BYSN ROASTERY

計5拠点(新潟、大阪、埼玉、東京、兵庫)

就労移行 るりはり

計2拠点(東京、埼玉)

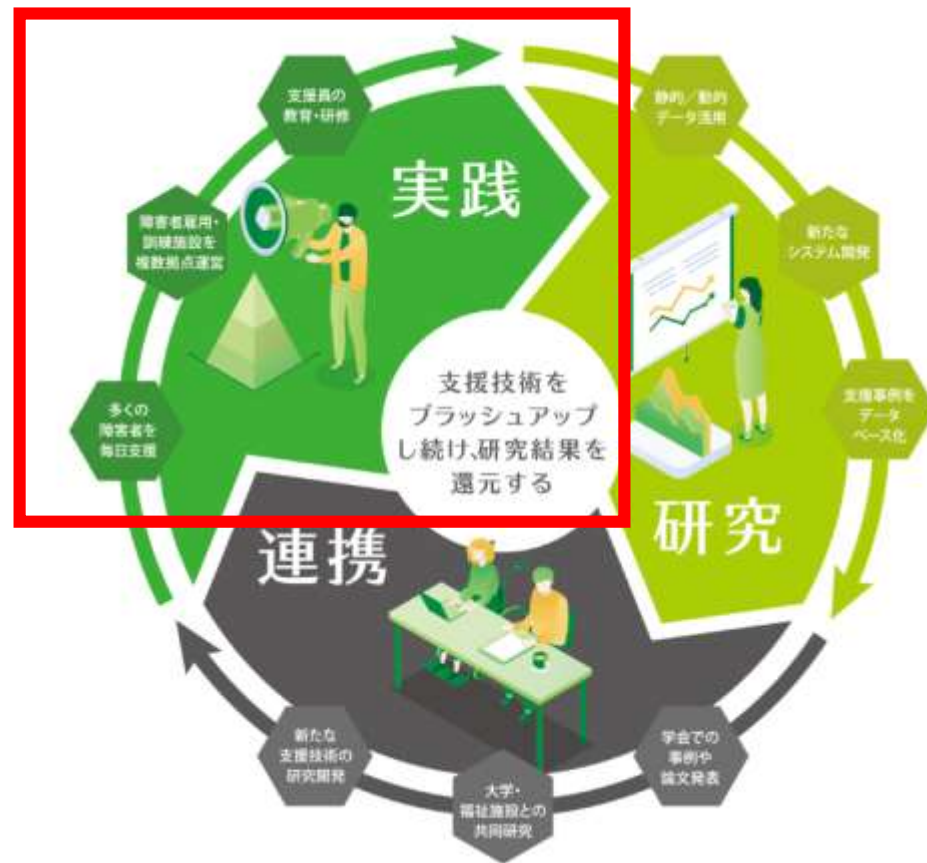


1,850名以上の障害者雇用創出

▶▶▶ 定着率88.2%

2023年10月1日～2024年9月30日の1年間

社内支援職：**276名**
※2024年10月時点



文脈的行動科学に基づく各種支援技術の教育プログラム
応用行動分析、関係フレーム、ACT、Process Based Therapy等

Process Based Therapy(以下PBT)とは

- ✓ Steven C. Hayes やStefan G. Hofmann らによって提唱された
新たな心理療法の「モデル」
- ✓ 診断名や病理名のみによらず、「目の前の個人にとって有効な心理療法」を
テーラーメイドで組み立てる
- ✓ 機能分析／生物生理学／社会文化的背景／過去の文脈等の個人を取り巻く、
複雑なネットワークを理解し、多次元的かつ多段階的にアプローチする

➡EEMMグリッドとは？

- ・ Extended Evolutionary Meta-Model
- ・ 拡張進化論メタモデルをもとに、プロセスを多面的・多階層的に整理するツールである。
- ・ 上段6行(感情～表出行動)は、個人レベルの発達の次元であり、下段2行(生物生理学、社会文化)の2つの階層の中に入れ子になっている。



EEMMグリッド活用場面

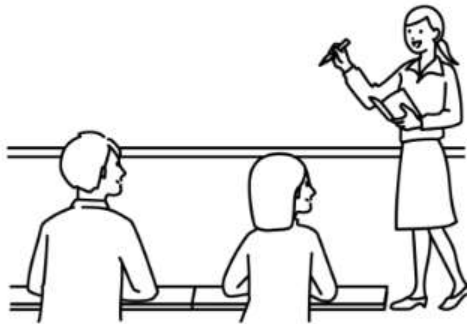
入社後の初期
アセスメント



休職・復職時のリワーク
プログラム



ケース会議整理



感情の高ぶりや、
思考にとらわれているとき

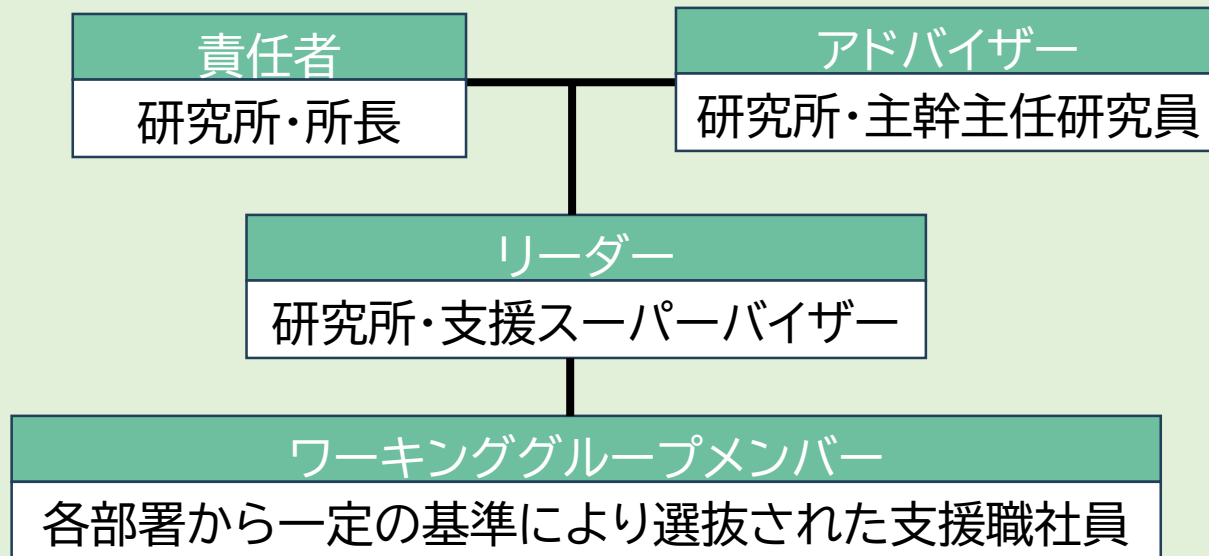


社内PBTワーキンググループ結成

◆ワーキンググループ結成の目的:

様々な障害のある障害者に対し、より働きやすい環境作りと合理的サポートが出来るよう、社内支援職を教育するため。

2023年度PBTワーキンググループ構成



PBTワーキンググループを通じた研究

※ワーキンググループ:『WG』

研究目的

WGメンバーによって収集された支援事例のうち、EEMM グリッドを用いて情報収集、整理したことで、対象者に生じる変化を確認

対象者

- ①職リハサポートを受ける障害者および企業管理者
- ②社内WGメンバー以外の支援職社員
- ③WGメンバーの親族の中から、何らかの心理的問題を有し、EEMMグリッド面談を希望する者

PBTワーキンググループを通じた研究

手続き

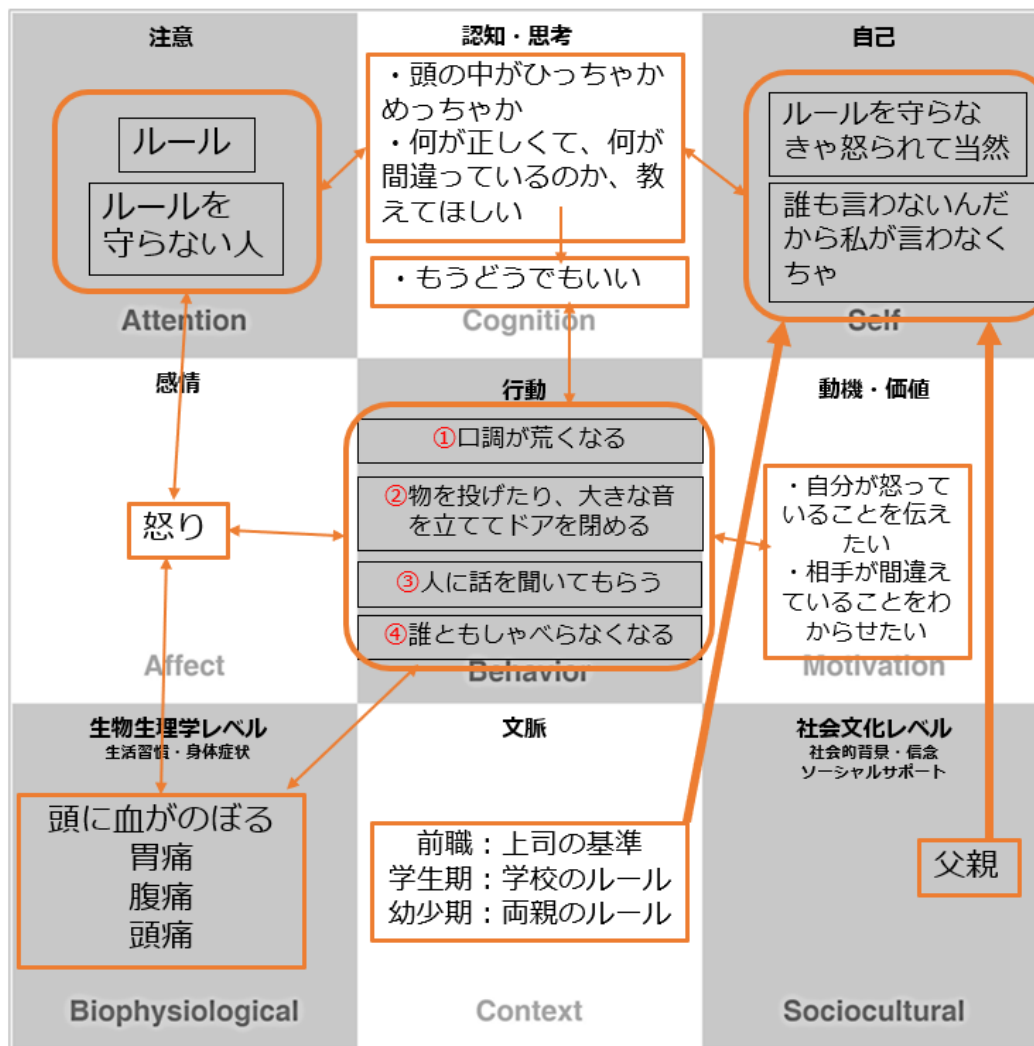
- ・所要時間： 60分から100分程度
- ・面談回数： 1回から2回
- ・実施方法： EEMM グリッド面談用紙を用いて、各エピソードについてヒアリング。その内容を9つのグリッドに分類して記録。
- ・質問紙による評価： MPFI (多次元的心理的柔軟性尺度)

分析方法

- ・対象者：22名
※内訳／支援職社員11名、WGの親族6名、
職リハサポートを受けている障害者5名
- ・内 容：面談前後のMPFIの数値についての
 t 検定による有意差の確認
※有意水準5%以下に設定

PBTワーキンググループを通じた研究

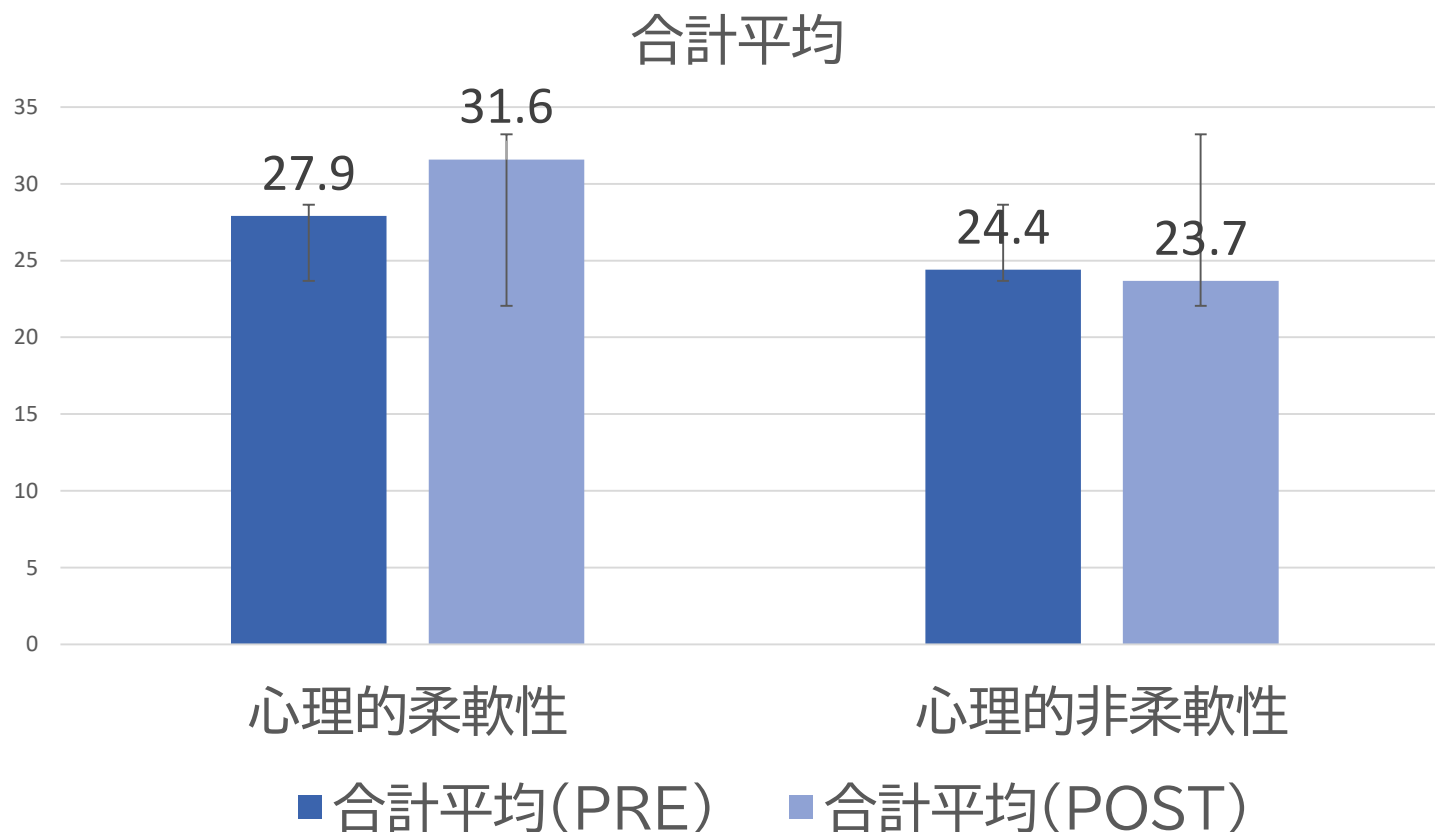
ネットワーク図として整理した事例



PBTワーキンググループを通じた研究

全体結果

心理的柔軟性の得点は、3.7Pt上昇
心理的非柔軟性の得点は、0.7Pt低下



PBTワーキンググループを通じた研究

全体結果

心理的柔軟性の得点は、EEMMグリッド面談前に比べ、**面談後に有意に上昇**した($t(21) = -3.57, p = .002$)。

心理的非柔軟性の得点は、面談前に比べて、面談後にわずかではあるが**低下したが、有意な差はみられなかった**($t(21) = 0.63, p = .538$)。

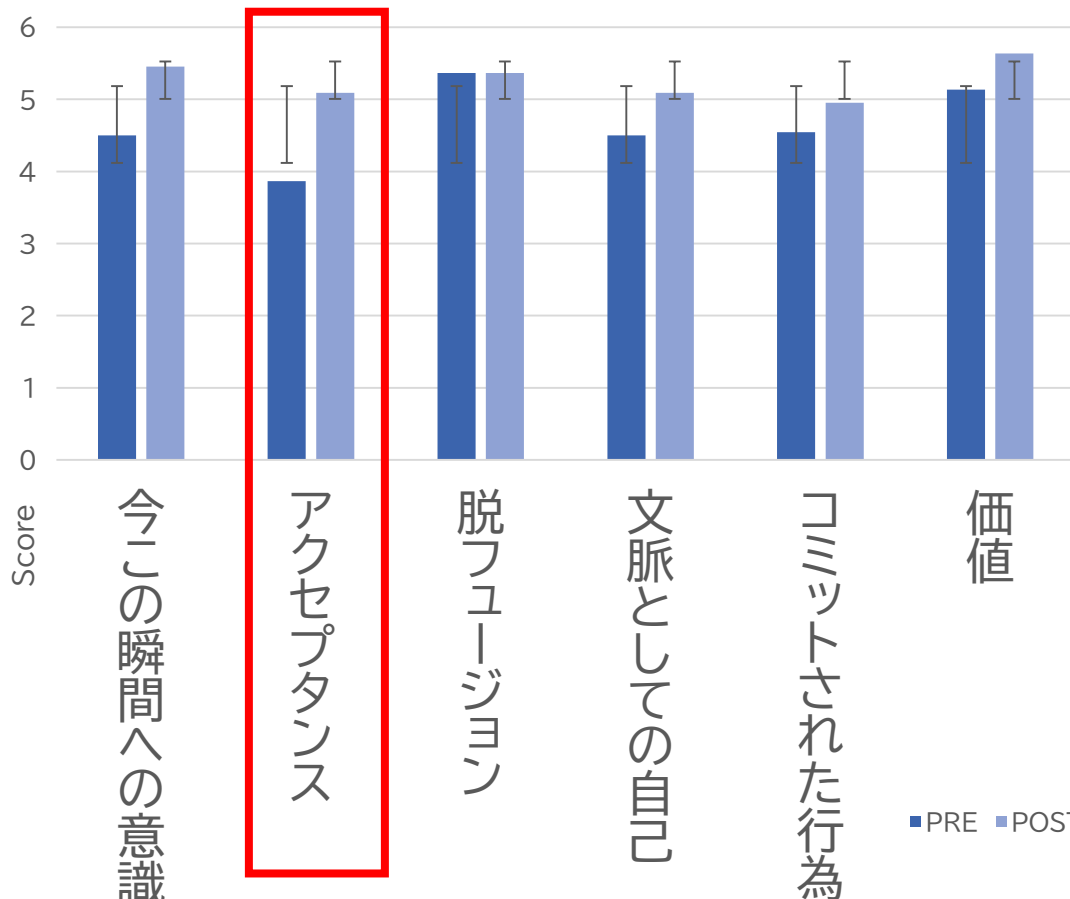
項目	面談前		面談後		t 値	p 値
	M	SD	M	SD		
心理的柔軟性	27.9	10.3	31.6	10.7	-3.565	0.002*
心理的非柔軟性	24.4	7.3	23.7	9.1	0.626	0.538

* $p < .05$

PBTワーキンググループを通じた研究

下位検査の結果(心理的柔軟性)

心理的柔軟性(各項目平均と標準偏差)

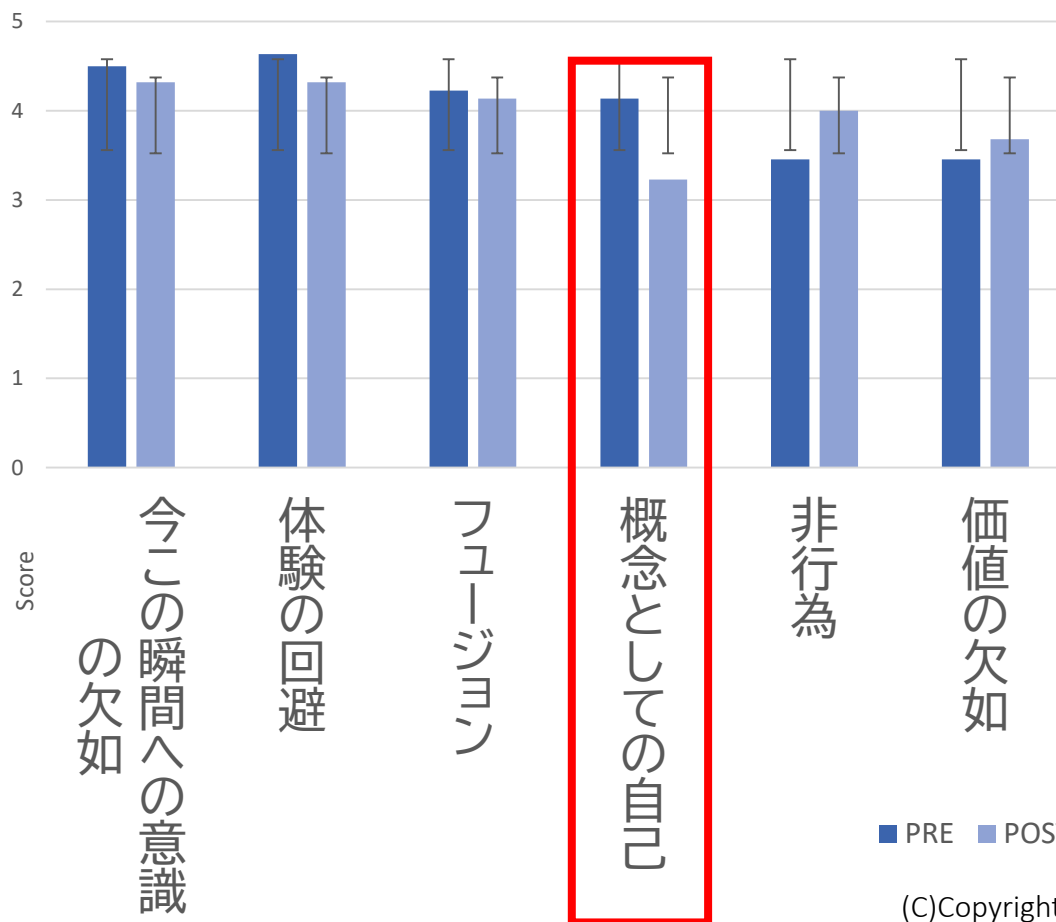


“アクセプタンス”が
PREに比べてPOST
に有意に上昇
($t(21) = -3.30, p = .003$)

PBTワーキンググループを通じた研究

下位検査の結果(心理的非柔軟性)

6 心理的非柔軟性(各項目平均と標準偏差)



“概念としての自己”
が、PREに比べて
POSTで有意に減少
($t(21) = -2.62, p = .016$)

PBTワーキンググループを通した研究

心理的柔軟性	PRE	POST		t値	p値
今この瞬間への意識	4.5	5.5		-2.022	0.056
アクセプタンス	3.9	5.1		-3.301	0.003*
脱フュージョン	5.4	5.4		1.000	1.000
文脈としての自己	4.5	5.1		-1.846	0.079
コミットされた行為	4.5	5.0		-1.204	0.242
価値	5.1	5.6		-1.190	0.559
* $p < .05$					

心理的非柔軟性	PRE	POST		t値	p値
今この瞬間への意識の欠如	4.5	4.3		0.310	0.760
体験の回避	4.6	4.3		0.924	0.366
フュージョン	4.2	4.1		0.266	0.793
概念としての自己	4.1	3.2		2.615	0.016*
非行為	3.5	4.0		-1.702	0.104
価値の欠如	3.5	3.7		-0.611	0.548
* $p < .05$					

心理的非柔軟性が上昇している箇所があることも興味深い結果である。

- ・自身が体験の回避や先延ばし行動をしていることに、あらためて気づいた結果か？
- ・自分の価値とは？価値に沿った行動として何をしているのかと自問自答する機会となっていた？

PBTワーキンググループを通じた研究

考察

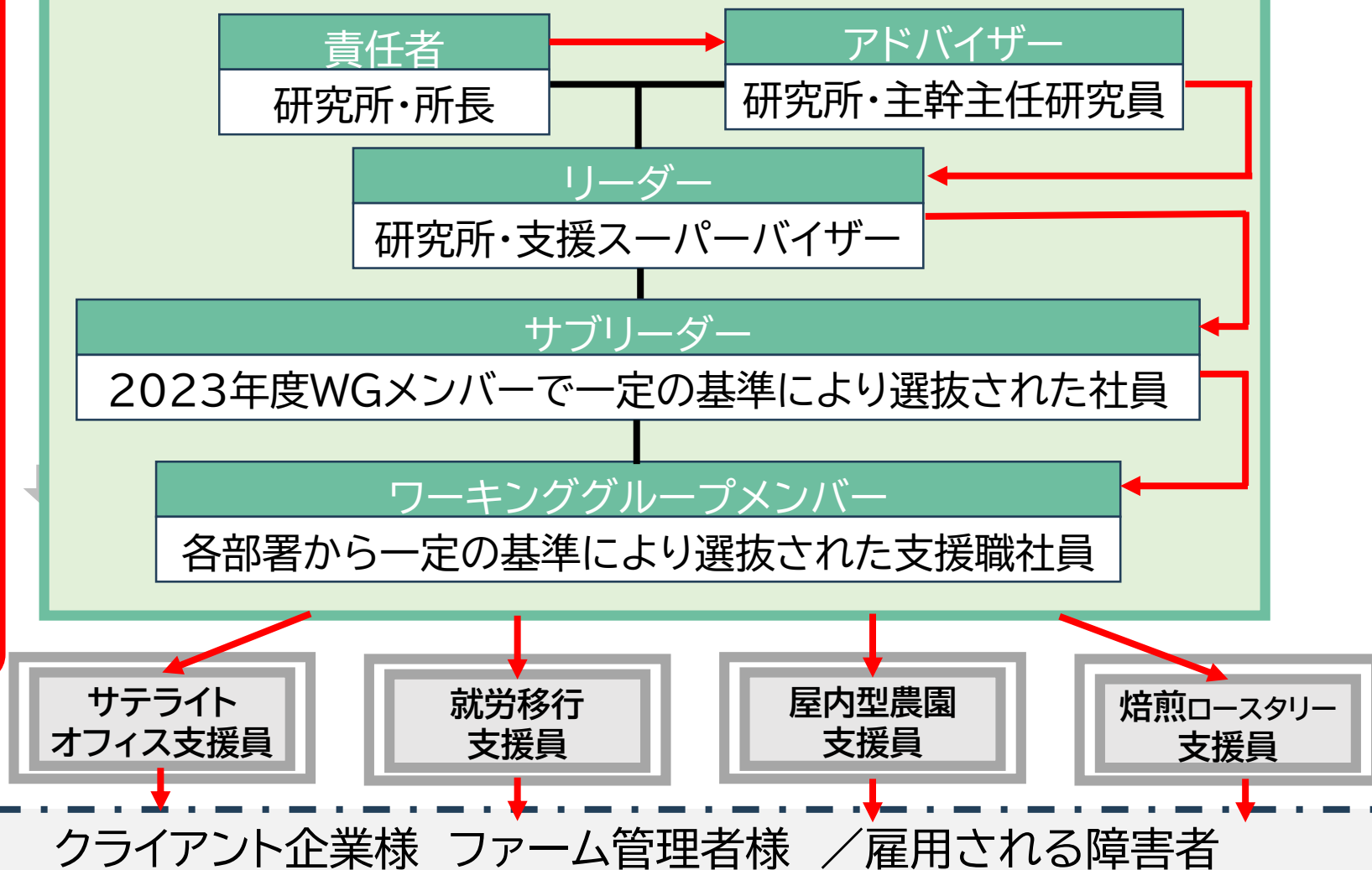
・EEMMグリッド面談によって、心理的柔軟性における変化が、5%水準の有意差で得られた。このことは、Hayes (2023) らが述べる ”特定の個人がもつ変化のプロセスを理解” し、**対象者の人生のプロセスをつぶさに見ていく作業の有効性**を示唆している。

・一方、不適応状態にある自分をアクセプタンスし、これまで焦点を当てていなかった適応的状态を目指そうとしたとき、**明確な価値が見出せていない**ことや、**価値に沿った行動が不足している**ことに気づく様子が見られた。

今後の展望

赤矢印の通りスーパーバイズを重ね、
ノウハウを各社の障害者雇用発展へ繋げる

2024年度PBTワーキンググループ構成



参考文献

- 1) Hofmann, S.G, Hayes, S.C, David, N.L.(2021). Learning Process-Based Therapy . Context Pr.
- 2) Hofmann, S.G, Hayes, S.C, David, N.L.(2021).Learning Process-Based Therapy. Context Pr.(ステファン,G.ホフマン,ステイーブン,C.ヘイズ,デイビッド,N.ロールシャイト.菅原大地,梶原潤,伊藤正哉 (監訳) (2023) プロセス・ベースド・セラピーをまなぶ.金剛出版.
- 3) Takahashi, T., Saito, J., Fujino, M., Sato, M., & Kumano, H. (2022). The Validity and Reliability of the Short Form of the Five Facet Mindfulness Questionnaire in Japan. Frontiers in Psychology, 13: 833381.

